

「底が突き抜けた」時代の歩き方 330

戦時下の精神状態

- チビチリガマの集団自決へと追い詰められていく経過

『チビチリガマの集団自決』（下嶋哲朗著、凱風社）にこう記されている箇所がある。

太平洋戦争時の沖縄戦において集団自決は、あちこちで引き起こされた。しかしそのほとんどは、日本軍の命令あるいは自決用の手りゅう弾を配るなどの直接、間接命令にしたがう自決だった。ほとんどということの意味は、今回のチビチリガマの調査のように、まだまだ明らかにされてはいない集団自決が、相当あると思われるからである。

事実、今回の調査を通して読谷よみたんという小さな村の中だけでも、ほかに二か所の集団自決があったことを確かめている。これらなどもチビチリガマと同様に知られてはいない。

アメリカ軍の沖縄本島初上陸の地点であった慶良間の一つ渡嘉敷島では日本軍に強要され、決行したとされる325名もの集団自決があった。

ノンフィクション作家の下嶋氏は、沖縄の中部にある読谷村よみたんそんの海からアメリカ軍が初めて上陸した1945年4月1日の二日後に、82名もの村人たちが集団で自決するという出来事が起こったが、誰に知られることもなく39年の歳月が流れ、その事実をあることから知って 事実の正確な記録を残そうと思ったと、モチーフを述べている。集団自決の起こったチビチリガマのチビとは沖縄の言葉で尻、チリは切る、ガマは壕のことで、尻切れ壕を意味する鍾乳洞である。集団自決が39年もの間知られずにきたのは、からくも生きのびた生存者たちが固く口を閉ざしてきたからだ。何度か事実調査が行われようとしたが、成功しなかった。

自分に都合の悪い、不快な記憶は忘却しようとする「自動忘却装置」が脳にはもともと備わっているといわれるが、著しく忌まわしい記憶になると、人はその記憶を封じ込めて事実そのものを消し去ろうとする。そうせずには生きていけないからだ。集団自決の生存者が固く口を閉ざすのも、あまりにも辛すぎるからだと思われるが、人は本当に忘れようとして忘れることができるものなのか。けっしてそうではないことが、次のように書き留められている。

「 - 38年も40年もたったというのに、この4月2日という日は、忘れることはできません。忘れなくてはいいけない、いいけない、と思えば思うほど、忘れられなくなってしまって……。」

「 - 悪い夢を、長いあいだ、見つづけているようです。家族がチビチリガマで自決をしている時、私は南部で女子学徒隊員たちと、それは、地獄よりもおそろしい戦争をし

ていたのです。捕虜になって、収容所へ入れられて、そこで人伝えに家族の自決を知りました。その頃、なぜうちは、南部で死ななかったか、なぜ残ってしまったのかと、死ぬことばかりを考えていました……。」

チビチリガマの集団自決がなぜ生存者の間でタブーになったのか。それは単に思い出したくない、息苦しい地獄のような記憶だったからだけではない。その事実を白日の下に晒すことは現在につながる問題であったからだ。

戦争前の沖縄では、自分の属する部落内の者同士と結婚することが、当たりまえだった。むしろ与那覇フミのように、たとえそれが道一本へだてたとなり部落であったとしても、他部落の者同士との結婚は、例外的なことであった。／このことはいきおい、一つの部落の中を血縁関係でかためることになる。こうした密接な関係の中で、誰が毒薬を注射した、誰が誰がということは、身内同士が傷つけあうことにほかならない。

著者は生存者たちの重苦しい胸の内を推し測りながら、それでも敢えて記録に取り組もうとする。もし集団自決の事実が、人に知られることなく、埋もれてしまうのだとすれば、いったいあの死は何だったのだろうか？ という思いに駆られてやまないからだ。今度の戦争では、かけがえのない生命の何と多くがうばわれたことか……。特に沖縄では15万人あまり、実に県民の4人に1人が死んだ。今こうして私たちが生きられるのも、日本が犯した戦争という大きな犯罪の代償を、島人の死によってあがなったからではないか……。私は、だからやらなくてはならない。

《もちろん、何よりも一番に大切にすべき賜物は生命そのものである。仕事は生命への挨拶であるべきだ。》という世界的チェリストのパブロ・カザルスの言葉を念頭に置いて、画家の自分は あの戦争で、あのガマで死んでいった人々の肖像画を、生き残った人々と共同制作してみよう！ と考える。そして戦没者数すら確認されていない沖縄住民の「戦没者全名簿作り」を力を結集して始めなくてはならない。それは残された者、生かされた者の死者に対する最低の義務ではないのか。だがそれは戦没者への追悼としての意味ばかりではない。何よりも「知ること」は、とりもなおさず調査者自身が戦争を追体験することではないか。調査はその人格へ大きな影響を及ぼさずにはおかないだろう。という未来への意味が掘り起こされるにちがいない。待つて与えられる平和ではなく、「勝ち取る」平和でなくてはならないことを思い知るために。

調査者自身にとって戦争の追体験が開始されていくような「知ること」でなければならぬし、その人格へ大きな影響を及ぼさずにはおかなくなるような調査が着手されなければならないのだとしても、調査には大きな難関が横たわっている。それは著者が外から来て、外へ 帰る よそものにほかならないことだ。過去の傷口を暴くだけ暴いて自分は調査終了後、さっさと帰るといったことに終わらないためにも、 住まう人 との共同作業を前提としようとする。チビチリガマの集団自決は、沖縄の一地域のできごととして、とどめてよいものではない。調査は過去を暴く。だがそれは体験者たちが今日

の人へ、また未来の人へ向けて、価値あるものを残すのだと理解してくれるのなら、暴きではなくなるのではないか。キズも単なるキズではなくなり、平和を産み出す、誇り高いキズとなるのではないか。

そのために、私のように 帰る人 だけではなく、 住まう人 読谷のあらゆる年齢層の人たちが参加する調査でなくてはならない。調査のための調査であってはならないのだ。

調査に参加した人たちは、さらに大勢の人たちと考えつづけていく。そうなった時初めて、この調査は暴きではなくなり、キズは単なるキズではなくなる。

過去の傷口としてばかり人は苦しむのではない。現在の傷口としても苦しみ、更に未来に刻印されている傷口として我々を待ち受けている筈だ。傷口の深淵も成長するのである。だから我々は未来の傷口と格闘するためにこそ、過去の傷口に必死に向き合わなくてはならないのだ。読谷村に友人を持たない著者はその地で自分の絵本原画展が開催されたことをきっかけに調査を訴えるが、どうも反応が鈍い。調査を訴えた若者たちの多くがチビチリガマの集団自決を全く知らず、チビチリガマの所在も、その名前すら聞いたことのない人もいたからだ。そこでまずチビチリガマへもぐることから始める。83年3月29日、15名の予定者がわずかに4名しか集まらない。「沖縄では、人が思いがけない死に方をしたら、その場所へ近づいてはいけない。死んだ人が迷って出るとか、バチが当たるとか、今でも人が信じる人が多くて……。」止められたのである。

ハブに用心しながら、サトウキビ畑の中にあるチビチリガマへと突き進む。瓦礫が山積したガマの狭い入り口を進むと、村人が「部屋」と呼ぶ少し広い場所に茶わんのかけらやビンなどの当時の遺品が点在しており、光の届かない真っ暗闇の奥まで更に進む。自決者たちに追悼の意を込めて、その光が闇に呑み込まれている懐中電灯を閉じ、一行は三分間の黙とうを捧げる。ガマへ入ったことで調査が始まっていく。証言から当時25歳の看護婦のユキが積極的に自決への役割を果たしたことが浮かび上がってくる。彼女は 自分の親族を中心に、次つぎ毒薬を注射していったという。その彼女も自決する。ユキは頭の良い、統率力に優れた人間だったらしい。だが、国のため天皇のために死ぬことこそ、もっとも誉れ高い死なのだという教育が、徹底して行なわれてきた時であった。そういう中で頭が良いとは、統率力とは何を意味するのか。いいかえれば、率先して死んでいく、人々を死へ導くということにほかならないはずだ。

ユキが徹底的に叩き込まれた教育として生徒が丸暗記させられた1890年(明治23年)発布の教育勅語の一部 - 《学ヲ修メ 業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ 進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ヲ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ》と、1943年(昭和18年)発行の国定教科書、小学校6年生用のその解説を著者は掲載している。《学問ををさめ業務を習って、知識才能を進め、徳ある立派なりっぱな人となり、進んで公共のためをはかり、世間に役立つ仕

事をしなければなりません。つねに国の定めを重んじて、法令をよく守ることが大切であります。いったん国に事ある場合には、勇気をふるひおこして命をささげ、君国のためにつくさなければなりません。このやうにして、あまつひつぎの大みわざをお助け申しあげるのが、私たち臣民のつとめであるとの仰せであります。》

「 - 注射はしているけど『たがや……誰か?』と聞いてからだったよ。暗いから名前を聞かないと、誰だか分からんわけさあ。そして親戚から注射を、どんどんやったよ。トシも注射されているよ。だけど、水飲む余裕がなかったから、助かったんだよ。」

「 - 注射されて、もう寝ておってよ、泣いて、天皇陛下バンザイ! と、もう叫んで……。」

以上の証言の他に、竹槍の突撃があったことも証言されている。

「 - 18歳の春がね、『日本男児じゃないか! みんな外に出て、戦いなさい!』と、おびえて、ふるえているうちらを、しかった……。みんなチビチリガマに避難する時、竹槍を持っていっているわけさあ!

みんな突っこんでいった。……竹槍なんかでと、今だから笑えるよ。その時は、もう本気で戦うつもりだったんだ。いくら本をつくっている人(筆者のこと)だって、うちの気持ちをとても分かっては、くださらないだろうよ……。ワー! ワー! と突っこんでいったら、アメリカーに、手りゅう弾を投げられて、機関銃を撃たれて……。源吾と義次の二人に命中して……。」

沖縄史研究普及会編『沖縄作戦』の次の記述から、竹槍突撃はチビチリガマだけではなかったことがわかったと同時に、住民を引きずりこんでの戦闘は、軍の予定の作戦行動であったことは、はっきりしている。

《……戦史に残る善戦をした伊江島の戦闘の大きな特色は、住民の戦闘参加であった。

その島民は、戦闘開始前から軍の作戦準備に絶大な協力を行なった。米軍が上陸した後も義勇隊を組織して、多数が軍の機構に参加し一体となって戦闘した。婦人も武器を取って第一線に進出し、竹槍や急造爆雷を抱いて斬込みに参加するなど、米軍をおどろかせた。》

先の証言に出てくる「18歳の春」については、著書の冒頭での次のような会話のやりとりの中にも出てくる。

「わからないさあ。ガマの中はよ、まっ暗して誰が誰やら、わからないですよ。うちも子どもが一人いなくて……。」

「コロシハシナイ、デナサイ。カマワン - COME ON(を人々はカマワナイと聞いた)、カマワンと。あれたちアメリカ兵のいうこと聞いておけば、こんな自決なかったのに……。」

「アメリカーにつかまったら殺される。これしか考えてなかったからねえ。友軍の日本軍が、中国なんかでやったように、殺されると、これしか考えられていないからねえ。」

「春は、お母さんに首切ってもらってね。死んだよ。アメリカーは、女の子は衣服はいで、股ひろげて強姦する。それも一人や二人ではない。数えきれない兵隊が犯すよ。そしてから、腹に銃剣つき立てて殺すよ。そんな目にあって死ぬくらいなら、いっそ母ちゃんがおまえを殺して、それから母ちゃんも死ぬからって、いわれてよお……。春は首切られる前に、母ちゃんにさあ、これまで育ててもらった恩を、何回も何回もくりかえして、それから他の避難民に向かって、みなさん、さようなら。みなさんも、日本人なら、日本人らしく、いさぎよく自決しなさい」といって……。包丁でねえ、母ちゃんに首切られて死んだよ。ブワッと、あたり一面血が飛びちってねえ……。春は18歳だったな。きれいで、頭の良い子だったのに……。」

調査は始まり、証言も出始めたが、すんなり進んだわけではない。「これは人数や、家族の確認だけなんですね？ なぜ、誰が、何をした、ということまでは、聞かないんですね？」という質問が出されたり、「以前、この調査をしようとして、私は失敗していますよ。トシさんのような調査をしようとしたら、そんな記録など、ないほうがいいのだ」と、いわれたんですよ。」という声も挙がってくる。そこで立ち入ったことは聞かないと約束して、被害者家族の確認に入っていくが、各家族の屋号や家系図作りでたちまち困難に晒されたりする。

チビチリガマの集団自決を少しでも理解するには、1931年9月、日本軍が始めたいわゆる満州事変以降の経過を知らなくてはならない。沖縄戦も広島・長崎の原爆もある日突然やってきたわけではなく、必然的なプロセスを辿ってその姿を露わにするに至っているからだ。満州事変は36年に日本が大兵力を中国へ送り込むことによって、全面的な戦争へと発展する。この日中戦争はやがて泥沼にはまり込み、身動きが取れなくなっていく状況の中で41年12月8日の真珠湾攻撃によって太平洋戦争へと突入し、戦線は中国大陆、フィリピン、インドシナ、インドネシア、ニューギニアを含む太平洋全域に拡大されていく。しかし、翌年6月のミッドウェー海戦の大敗北を皮切りに、日本軍は敗戦への道をひた走る。以後、アッツ島、マキン、タワラ、サイパン、テニアンと、各線戦では日本人民間人をふくめた“玉砕”という名の集団自決がつづく。特に1944年7月に起こったサイパンの“玉砕”では4万人もの人間が死んだ。この大量自決こそは後のチビチリガマの集団自決にも、大きな影響をおよぼすことになる。

44年7月のサイパン陥落によってアメリカ軍の本土上陸が時間の問題として迫ってくる中で、まず44年10月10日早朝、アメリカ軍は那覇市を空爆する。沖縄上空に達した機は、およそ9時間にわたる、無差別攻撃を開始する。それは沖縄県民に戦争のおそろしさを、はっきりと体験させる初めての波であった。艦載機は那覇市の約90パーセントを破壊しつくした。住民の死傷者はおよそ500人。日本軍関係死傷者はおよそ650人。県民一か月分の食糧の焼失。家屋の全焼、全壊は11451戸。それにぼう大な軍需物資が失われた。爆撃は那覇だけではなく、読谷村にも及び、宇座部落

誌によると、《若い男女9人が朝、飛行場作りにと、家を出て空襲に会い、帰らぬ人となった。》

宇座部落誌には次の「話」が掲載されている。

《飛行場の土運搬をしていました。(空襲が始まり)こわくなってオロオロしていると、近くにいたおばさんが、「こっちに壕があるから来なさい。来なさい。」と、叫んでいたの、狭い壕に12人が入ったのです。

「ウマンカイ、壕又アンリルムン、カックラナ(そこに壕があるらしいから、みんなでかきよう)。」と、みなひとつの壕に入ったのです。

それから間もなく、爆弾が落ち、入口は土でふさがれてしまいました。

壕の上は道になっていて、人の歩くのは音で分かりました。

靴の音(日本軍)が聞こえると、みんなで、一、二、三と、「兵隊さん助けてくれ！助けてくれ！」と、叫んだのですが、外からはその声が聞こえないのです。死力をふりしぼっての叫びもむなしく、だんだん息苦しくなってきます。

出口のない暗い壕の中で、「アー、ナーワンネ、タシカランムン(ああ、もう私は助からないもの)。」と、いいながら、「天皇陛下万才」を叫びつつ死んでいきました。天皇陛下万才という悲痛な声は、今でもはっきり、おぼえています。》

波平部落の人々も爆弾が次々降る下をかいくぐってチビチリガマへと急ぐ。波平には他にシムクと呼ばれるガマも、インゲーと呼ばれるガマもあり、また変わる事のない北と南の二つの入口があるチビチリガマのうち、北のガマを含むそれらのガマでは自決は起こらなかった。この10・10空襲以来、読谷村への空襲は散発的に行われており、

チビチリガマの住人たちは空襲がないと家へ帰り、畑を耕すという不規則な生活をもう5か月半あまりもつづけていた。だが家を失った者、体の不自由な者たちは、ガマから一步も出ないという生活をつづけていた。

アメリカ軍は読谷村にある北飛行場と隣り村の嘉手納にある中飛行場を奪取して沖縄島を南北二つに分け、日本軍の勢力を分断し、更に奪取した飛行場を日本本土への進攻基地及び中国内での日本軍叩きの発進基地にすべく、約18万3千人の兵員を45年4月1日に読谷村と嘉手納の浜へ上陸させる作戦を立てた。3月23日、アメリカ軍の上陸作戦が開始され、はげしい空襲につづき、翌24日は艦砲射撃を開始。その規模は艦載機のべ一日400～600機。艦砲は一日千～3千発を上まわった。23日から27日までの4日間に、北、中両飛行場を持つ読谷村と嘉手納村には、飛行機のべ3095機が飛来。艦砲は25日から31日の間に、1万5千発以上、5162トンが撃ちこまれた。/日本軍には、なす術はなかった。すでに制海権・制空権は奪われていた。

当時13歳の少女の手記(『随想父母と語る』私家版)にはこう綴られている。

《私たち家族はクルナミ山(本部半島)に避難することとなった。父を先頭に、母は秀勝(生後5か月)をおぶって、昭子(11歳)、幸子(9歳)、キミ子(5歳)。

みんなモンベ姿に防空ズキンをかぶり、リュックを背負っていた。クルナミ山に行く途中で飛行機がくると松林にかくれ、通りすぎるとまた歩き出す。小雨も降って道はすべり、足もとがおぼつかない。トムイ（地名）を過ぎ、キーガイ屋（屋号）をすぎ、ナガタキ原（地名）におりる坂道で、母が子どもをおぶって、たくさんの荷物を頭にのせたまま（沖縄は頭上運搬）すべってころんだ。

父は荷物をおろして、母を助けてくれた。ナガタキ原をすぎ今帰仁原（本部半島の地名）に登る坂道で、キミ子が石につまずき、ころんで泣きだした。（…）

みんなたくさんの荷物を持っているので、かまってやれない。とうとうクルナミ山まで泣きどおし。当時の母の気持ちを思うと、今でも涙が出て止まらない。やっとクルナミ山についた。

それから私は父と共に食料はこびに、また帰る途中、グラマン戦闘機におそわれた。

いつの間にか沖縄のまわりは、二重三重にアメリカの軍艦にとりかこまれていた。

時たま日本のユー軍機が、力のない音をして飛んでくると同時に、敵艦から何十何百とタマが打ち上げられ、空一面真黒い煙でおおわれる。

その中を敵艦めがけて体当たりしたか！　と思うと、海中にザブンと白い波しぶきを残して散っていく。

また一人の尊い命が失われていく。私たちは胸が痛くしめつけられる。敵艦はビクともしない。

みんなは、もう日本軍機が現われないことを祈った。》

4月1日、空には一片の雲もなく、風は弱い。アメリカ軍は早朝から空母11、戦艦10、巡洋艦9、駆逐艦23、砲艦117の大艦隊でびっしり海を埋めつくし、いっせいに砲撃を開始した。沖縄上陸作戦 L・DAY（LはLOVEの略、つまり愛の日）が敢行され、空からは無数の飛行機が爆撃を繰り返し、平和だった村は、火山爆発のようなすさまじい炎をふき上げていた。上陸直前に日本軍は北、中両飛行場の守備を放棄して部隊を南部首里方面へ移動したので、アメリカ軍は何の抵抗も受けることなく、一時間以内に約1万6千名以上の将兵が上陸を完了した。そして多くの住民、学童たちが血を流して完成させた読谷、嘉手納の両飛行場は昼頃までに占拠され、一機の日本機も飛ぶことのないまま、その日の暮れるまでに、アメリカ軍の橋頭堡は作られた。正面約13.5キロ、深さ約4.5キロ、兵力は6万名以上の集結を完了した。こうして沖縄全面進攻の足場は確保され、日本国内における唯一の住民をまきこんだ地上戦の火ぶたが、切っておとされた。

アメリカ軍の悠々たる「無血上陸」は読谷村の住民にとっては、来たるべきチビチリガマでの集団自決へと追い詰められていく経過への一步にほかならなかった。

2002年9月27日記

